

## 「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成27年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：27.5.18(月)

開催場所：今治市民会館

どうも、皆さん、こんにちは。今日は、それぞれの分野でご活躍の皆さんにお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。毎年地区ごとに、こうした意見交換を開催し、愛媛県の県政の報告と、それから、それぞれの分野でのさまざまな意見を頂戴する中で、県政の施策推進に生かしていこうというのが、「知事とみんなの愛顔でトーク」ということになりますけども、ご参加いただきまして、心から感謝を申し上げたいと思います。

### 【今治地域の魅力】

今日はせっかくの機会なので、朝からずっと、菊間から入って玉川、それから、こちらのほうに来たんですけども、今日1日だけでも新たな発見もあれば、ここをもうちょっと工夫したら面白いまちづくり、地域おこしができるなという要素に気付くような半日間でもありました。特に今日は、ダム湖周辺でのいろんな取り組みを拝見させていただいたんですが、水上、湖上を自転車に乗って走れる催し物の体験をさせていただいたり、それから、農協の支所を活用した地域の皆さんによる食堂の運営の状況を見たり、万葉集の公園づくりとか、本当に地道な取り組みというものが、少しずつ広がってるなということをつくづく感じます。

また、玉川は、鈍川温泉というのは本当にいい素材で、今、申し上げたような住民の皆さんによる取り組みとうまくリンクすれば、本当に黒川温泉のようなすごいスポットになり得る可能性を持ってるなということを感じます。僕も子どものころ、あそこの溪谷でバーベキューをやったりした記憶がよみがえってきたんですけども、溪谷というと中予地域では面河溪谷でありますけども、玉川の溪谷はそれに匹敵するようなきれいな水と景観があるわけですし、後は、宿泊所があるというのはにぎわいをつくっていく鍵を握ってますので、鈍川温泉の関係者の皆さんが、そこを核としてどういうふうにしていくのかということで気持ちを一にしたとするならば、面白い取り組みがいくらかでも可能性として広がるなということ、今日お伺いしながら感じたところでございます。

### 【イベントは地域住民が主役】

今治地域は12の市町村が合併したまちでありますけども、特に昨年は島を舞台に「瀬戸内しまのわ2014」というイベントを開催したところであります。今治だけでなく上島町も含めて、島のイベントというものがもたらす力というものを発揮したい、そんな思いでございました。

もともとこれは、松山市長のとときに市町村合併、中島という5つの有人島を合併した経験がありまして、当時、中島は、島はこれで終わりだと、松山という大きなまちに吸収されて町名も消えて、1次産業しかない、衰退の一途をたどる。もう何をやっても無駄。そんな空気が実は合併当時漂っていました。そこで当時、いや、そんなことないんだと。合併したからには、その力というものを大いに島の地域づくりに活用するという逆転の発想

を持っていただきたいという話と、それから、島という、普通に考えれば地理的なハンディキャップのあるところになりますけども、であるが故に、自然の中の非日常というコンセプトで捉えれば、そこには都市部の皆さんから見れば、垂ぜんの的となるようなさまざまなコンテンツが、島の皆さんにとっては日常のものが、実はとてつもない魅力を輝かせる可能性があるというような話をしました。ただ、まちづくりというのは、待っていてもうまくいくものではないと。その場合は行政主導になってしまう。そうではなくて、あくまでも住民が主役であって、住民の皆さんが諦めずに立ち上がったとき、それを行政が後押しをして一緒になって動いていったときに、初めてうまくいくものだという、こんな本当にたわいのない基本的なことなんですけど、そんな話をずっと島々回りながらしていました。だから、待っていても何もしない。皆さんが本気になってやるとなれば、当時は松山市でしたけども、徹底的にやると。二者択一でいこう、そんな話をした記憶がございます。そのうち島の皆さんがやってみようということになって、当時は中島が中心でありましたけれども、「島博覧会」というイベントにこぎ着くことができました。そのときをきっかけとして、多くの方々が島に訪れ、そして島のファンになり、また、島の1次産業の顧客にと育っていくという体験がありましたので、今の県の仕事いただいたときに、「しまはく」の拡大バージョンとして「大島博覧会」というのをやったらどうかな、それがそもそものきっかけだったんです。手法は同じでありまして、当時大三島、伯方島、大島、魚島、関前、それから、上島の各諸島を巡って同じ話をしました。本当に島の皆さんがわが事として立ち上がってくれるのであれば、こういうことやりたいと。そうでなければ、生きたお金の使い方ができないので、それは皆さんで決めてほしいというような、そんなところから入った記憶がございます。当初はなかなかエンジンがかかりにくかったんですが、しまのわが始まってみますと、途中段階で、いや、こんなことだったら、今からでも遅くないかもしれないので、企画イベントを追加してやりたいというのが、どんどん出てきて、主役は自分たちだというような空気が拡大していったような、そんな実感を持って「しまのわ2014」に取り組むことができました。

### 【イベントの意義】

そこで時折、大勢の人を惹き付けるために、今治市や上島町とも一緒になって、自転車を活用した新たな観光振興策というのを提示し、そのために世界の関係者を巻き込んで膨らました形が、「国際サイクリング大会」ということになったわけでありましてけども、例えば、島から見ると最初は、「自転車が来てもお金が落ちんで、ただ通過するだけやないか」、そんな意見もよく聞きました。でも、そうじゃないんですね。人を連れて来るということが一番難しい課題であって、人を連れて来る仕掛けをしたら、今度は地域の皆さんが、じゃ、来た人にどのような魅力あるコンテンツを提供し、そして、そのコンテンツをどう情報発信して相手に伝えるか、これはもう行政ではなくて、それぞれ個々の取り組み次第だと思います。もし、それがうまくフィットした場合は、来た人たち、例えばサイクリストでも、来て、いや、ここへ来たら、あそこの店に行かなきゃいけない。あそこ行って、あれを土産として買って来るのが定番だ。そういう情報になってくると、立ち止まって消費活動が起こってくるという循環が生まれてまいります。

サイクリングも、最初に来る人たち、プロ的な人はお金をあまり落としません。次に来る人たちというのはセミプロ。これもあんまりお金を落としません。次に来るのはにわか

サイクリスト。この人たちがだんだん宿泊したり、お土産買ったりという層になってまいります。そして、そこまでいくと、今度はレンタサイクルというのが生まれてきて、今度は車で来る人が登場する。車で来て、ここはサイクリングのメッカだから、1泊してレンタサイクルで走ってみよう。ここが一番消費活動してくれるところなので、一足飛びに物事はいかないけれども、理論的に物事を考えて分析して取り組むことによって、必ず地域活性化に結び付けることは可能であるということで、いろいろお話をさせていただきました。

例えば、これはサイクリングのイベントだけではないんですけども、人を呼び込む仕掛けがイベントとするならば、ともすれば、行政主導でやると一過性で終わりがちであります。どんっとやって、バンって花火が打ち上がって、ああ、良かったね、いや、疲れたね、いつかまたやろうと、これで終わってしまうというのが定番であります。そうではなくて、こんな話もしたんですけども、そのイベントで人が来たならば、地域の方は可能な限り、一番お金の掛からないのがメールアドレスですね、場合によっては携帯電話、住所、そういうものをキャッチしてほしい。それがキャッチできたとき、その新たな名簿というのは、可能性の高い顧客リストになるということだろうと思います。そんな形でイベントを捉えると、取り組みの仕方が随分と変わってくるのではなかろうかな、そんなふうにも思うところがあります。

まとめて言うと、今までというのは、どちらかと言えば市民参加という言葉よく使われたと思います。でも、これはまちづくりの考え方からすれば少しおかしな話であって、市民参加というのは行政が主体であったときに、行政が、市民の皆さん参加してくださいよということで生まれてくる言葉であります。これは本来のまちづくりを考えたときに、好ましいことではない。逆に言えば、理想的なのは行政主体の市民参加ではなくて、市民主体の、町民主体の行政参加というのが、本来のまちづくりの考え方であるはずだと、僕は随分昔から考えていました。その形ができたときに、さっき言ったように、住民の皆さんがわが事となって立ち上がり、行政が参加して一緒になって汗をかいて取り組みを進めていくときに、初めて地域の施策というのが魂を持つというふうに、今でも信じているところでございます。

### 【県内各地域の特色】

さて、そんな基本のお話から始めさせていただきましたけれども、愛媛県には本当に恵まれた素材がいくらかでも眠っている、そんなふうにも思います。これまではどちらかと言えば、地域、地域だけで展開をする。横串の連携もあまりxない。そして、宣伝が少しうまくない。こういうところが問題点として感じていたところでありました。そこで、今は20の市町、せつかく合併して苦しい道りを超えてきましたから、その少なくなったことを逆に生かして、連携を深めようという呼びかけを、県内それぞれのまちにさせていただいています。そして、お互いを知る。そして、さらにそれを結び付けて磨いていく。こういうことが大事なのではないかな。そこで「チーム愛媛」という言葉をよく使わせていただきます。

県内も考えてみたら、この今治をはじめとする東予エリアは2次産業が中心ですし、松山市を中心とする中予エリアは3次産業が中心でありますし、南予地域は1次産業の中心地であります。1つの県で産業構造がこれほど異なっていて、バランスを保っているというの

は、ちょっと他には例がない。この愛媛県ならではのバランスをうまく生かす方法が、チーム愛媛という横串ではないかなということを感じました。

ちょうど連休は、昨年は1年間しまのわの関係で毎週島、島しょ部、東予のほうを中心に来ていましたので、今年は南のほうに行ってまいりました。来年は南予全体で南予博覧会のような形を求めて、今、地域住民と話を進めているところなんですけども、自分なりに素材を探しに行ってきたんですが、例えば、今治だったら「さいさいきて屋」がありますし、隣の西条行けば「周ちゃん広場」がありますけども、実は愛媛県の道の駅というのは非常に評価が高いです。先日、全国の道の駅ベスト20ぐらいが選ばれたんですが、そのうちに愛媛県が3つか4つ入ってるんですね。全国でのベスト20に3つか4つ入っているのは、ものすごい確率であります。南予にも、1日で欲張って回ってきたんですが、宇和島まで高速道路が開通してにぎわいを持っている三間の道の駅、隣の鬼北町の道の駅、そして、隣の松野町の道の駅。さらに戻って宇和島の道の駅。そして、ちょっと上がって八幡浜の道の駅に行って、最後内子町の「からり」の道の駅に行って、6つ回って帰ってきたんですけども、それぞれ特色が違うんですね。連休中はどこの道の駅に行っても満杯でした。駐車場入れないんですね。臨時の駐車場を構えるような大盛況だったんですが、三間行ったらお米、鬼北行ったらユズ、松野町行ったらウメやモモ、宇和島行ったら魚、八幡浜行ったら加工品、そして、からり行ったら野菜関係と。置いてあるメインになるものが全部違うんですね。今治のしまのわの場合は、しまなみ海道というのが1つのポイントになりましたけども、来年の南予博覧会、南予の場合は、道の駅のネットワークというものがある1つ大きな鍵を握っているなということを感じました。愛媛県というのはお米も含めて、お米は量が少ないですけども、食材に関していえば、肉、魚、野菜、柑橘、何でもありますから、県全体で考えた場合、素材の宝庫と言っても言い過ぎではないぐらい力を持っているということを感じます。これをどう売っていくのかということに自分は力点を置いていきたいと思っています。

そしてまた、今治、上島の産業といえば何と言っても造船であります。海運であります。タオルであります。工業地帯ならではの特色を持っているんですが、東予全般に言えることなんですけども、10万ずつぐらいの都市が4つ並んでいます、全部主要産業が異なるところにまた魅力がある。

### 【県営業本部の活動】

主要産業の下には加工技術とか、高い技術力を持った中小企業がいっぱいあるんですね。ところが、この中小企業も農林水産物と同じように、技術はあっても営業力が弱い。1次産業はいいものつくっていても、営業力が弱い。ここが弱点であります。これまでは系列の中で何となく仕事をしては物足りたんですが、日本の人口が減少していく中で、海外も含めて外に出て行かなければ、将来を切り開くことができない時代に入ってきてまいりますので、愛媛県では農林水産物の後押しをするため、そして、また中小企業の技術も営業の弱さをカバーするために、営業本部という部署をつくりました。もともと自分自身が商社マンでありましたので、そのときのノウハウを使いながら、県庁職員の営業部隊というのを今育てているところです。愛媛県が主催する商談会、切り開いた販路に来ていただいて、後は勝負していただくというサポートをするんですけども、3年目に入ります。初年度は愛媛県の営業本部がサポートした新規のビジネス成約額が8億円でありました。昨年2年

目が 27 億円になりました。今年度 3 月締めたところ 56 億円の新しいビジネスを、そうした 1 次産業や中小企業の皆さんに提供できた実績が積み上がってまいりました。これからの目標は 100 億円のサポート体制でありますけども、これは一筋縄ではいきませんので、海外にもどんどん切り開いていかなければ、到底その数字は達成することができないと思っています。県庁そのものがビジネスするわけではないけれども、そこで後押しして、中小企業や 1 次産業が元気になれば当然雇用が生まれ、税収が上がり、いろんな施策の展開に結びつく好循環が生まれるので、地方における新たな経済活性化策という位置付けで、愛媛県の場合は、この営業戦略というものに力を入れているところでございます。

#### 【優れた工業技術を持つ東予地域】

今治、上島は、造船、海運が盛んなことによって、工業生産高は県内の 20 の市町の中で、今治は断トツの 1 位であります。松山市が人口 52 万で工業生産高が年間 4,500 億円ぐらいですけども、四国中央市が紙を中心に 6,000 億、新居浜が住友関連企業を中心に 7,500 億。西条が先端産業の工場部を中心に 9,000 億。そして、今治が 1 兆 2,000 億でありますから、いかにその工業力が強いかがということが、数字で明らかになっているわけであります。

今、国の経済政策で円安が常態化しております。でも、この円安というのはプラスのメリットを享受できるどころと、逆にマイナス面と向き合わなければいけないところと、プラスマイナスはゼロであります。今治の場合は、当然この円安の恩恵をもらに受けるのが造船業界であります。今、造船業界はここ数年超円高で、韓国や中国勢との価格競争で、なかなか厳しい環境に置かれておりましたけれども、技術そのものは当然世界トップクラスでありますから、この円安によって国際価格競争力を取り戻したという状況が生まれています。

一方、円安によって大変なのが内需型の、国内だけで完結する産業でありまして、こちらは燃料代が高騰する、あるいは飼料、肥料代が高くなる、そのコストアップ要因を価格転嫁できないので収益が厳しくなると。こういうふうなところも目を向けておかなければなりません。プラスマイナス両方あるということで、きめ細かい対応が求められているところでありますが、造船、海運は、そういう意味で物流が動き始めれば海運も良くなっていくというような状況にあります。

そして、またもう 1 つはタオルは、本当にこれまで、中国の安値競争の中でなかなか厳しい状況が続いていました。かつて今治地域には 550 社ぐらいのタオルメーカーがあったと思いますけども、現在 120 ぐらいでしょうか。ただ、この 120 というのは、その競争で努力して、いいものをつくって生き残っていかうということに、全力を傾けてきたつわもの集団であります。

実は、県庁も大きな役割を果たすのが技術面のサポートであります。紙産業においては愛媛県の紙産業技術センター。そして、タオルにおいては今治にあります繊維産業技術センター。そして、1 次産業、柑橘はみかん研究所。あるいは、魚でしたら水産研究センター。肉でありましたら畜産研究センター。林業でありましたら林業研究センター。全て県職員が技術面のバックアップ体制を取っております。ここはあまり表に出てこないんですけども、例えば、タオルメーカーでありましたら、県の繊維産業技術センターに最新の設備を置いて、中小企業の方にそれを自由に使っていただくと。こういう糸が欲しいんだけどどうだろうかということを愛媛県の職員が研究して、それを開発していくという共存体

制というか、バックアップ体制を敷いているのが特色になっています。そういう中で、今治ブランドというものが広く浸透するという時期を迎えて、これは国内だけではなく、海外にまでその名が広がり始めている段階を迎えました。

たまたま今年、日本の航空会社の1社が、アメリカの女子のゴルフトーナメントNPGAのオープニング試合の冠スポンサーになりました。その会社に、とにかく愛媛産品を使ってくれと。タオル、真珠、食べ物、いろんなものを売り込んでいたんですが、1つ答えを返していただきまして、その冠スポンサーになったアメリカのオープニングの女子のゴルフトーナメント。これは昔からずっとやってるんですが、冠をいただいたのは今年からなんです。結構有名なトーナメントで、最後のコースのところ大きな池がありますが、優勝者は池にみんな飛び込むというセレモニーをやるということで有名な大会なんです。そこで何をしてもらったかという、優勝者が池に飛び込んだ後に、池から上がって来たところでガウンを着るんですが、ここで今治タオル製を使ってくれるということになりまして、今回初めてお披露目ができて、これでアメリカに進出するきっかけが生まれるんじゃないかな、そんなふうにも思っております。

### 【テレビ出演による愛媛のPR】

ところで、ちょっと先の話になるんですが、先週上京してきまして、東京のあるテレビ番組の出演を依頼されました。「ジョブチューン」という番組なんですけど、土曜日の夜7時から2時間番組でずっとやってるそうなんですけども、その収録のときは、「全国知事によるお国自慢バトル」というテーマだったんです。47人の知事が一堂に会すわけにはいかないんで9人が声をかけられまして、番組の中でお国自慢を繰り広げるというような2時間番組なんですけども、9人ですから、各県知事から自分の地域の宣伝をするコーナーが9人分あると。その中で「宿命の対決バトル」というのがあって、僕の出番は宿命の対決バトルの一番バッターと、それから、9人の知事のトリ、最後。順番としてはおいしいところいただいたなと思うんですが、バトルのところは、どことの対決だったかというところ和歌山県であります。言わずと知れたミカン対決なんです。和歌山県の知事が手を挙げて、「愛媛県に物申す」とか急に来ますよ。愛媛県に物申すって「なんじゃっ」て言ったら、愛媛県はミカン、ミカンって言うけども、和歌山県が生産量1位、我々が1位で、質も量も我々が勝つと、こう来るわけですね。それに対して言い返すわけですよ。ミカンカレンダーというのを持って行きますよ、何を言ってるんだと。和歌山もいいものつくってるかもしれないけど、愛媛県は種類が違くと。種類の多さが違うんだと。一番端っこに温州ミカンって書いてあるけど、これも愛媛県いっぱいつくってるけど、和歌山はこれしかつくってない。たった1個で日本一って言うだけで、勝負になりませんがなって言って、ガンガンやり返しておきました。5月30日に全国放送します。他は、今治タオル、今治タオルも、目の前に水槽を用意して、今治タオルのこれぐらいの切れ端と、それから、普通のタオルの切れ端を用意して、水槽に漬けたらどれだけ違うかという、出演者の前で実験をしました。違いが分からなかったら逃げて帰ろうと思ったんですが、吸水性の高い今治タオルは入れた途端に水を吸い込んで、サーっと落ちていきますよ。一般のタオルはいつまでたってもぷかぷか浮いてるんです。それ見たことかと。今の日本の高級ホテルも今治タオル全部使ってくれてますので、これからは今治タオルを使っていないホテルは一流ホテルとは呼べないと、こういう時代が来たというようなことを、そこは

カットされちゃうかもしれませんが、そんな感じで愛媛県の宣伝ガシガシとやっておりますので、皆さんにもさっき言った愛媛県全体の、その地域をメインにして、そして、できれば愛媛県全体の違った魅力もそれぞれの地域で共有し合って、横串を入れてチーム愛媛でPRして活性化をしていくような、そんな空気が強まってくればなと願っております。

#### 【自転車を活用した観光振興とみきゃんへの応援】

最後に去年は、さっき話したサイクリングの仕掛けをさせていただきましたけども、しまなみ海道をともかくサイクリストの聖地にして知名度を上げる、これが第1の目標でありました。第2の目標は、しまなみを中心にして、ここに来たら、実は東予にも南予にもいろんなコースが待っている。2次情報を提供して波状攻撃をかけるというのが、考えていた作戦でありまして、しまなみ海道を世界のサイクリストの聖地にするというのが第一段階で、今度の目標は愛媛県全体をサイクリストのパラダイスにするという、そこまでフィールドを広げて、他の県とは違った、特化した魅力を磨いていくことによって、観光振興に結び付けたいというのが次なる目標であります。そのためにも、やはりしまなみ海道の果たす役割、非常に大きいわけでありまして、また、「村上海賊の娘」という本屋大賞の作品が、今後どう扱われていくのかによって、これは上島も含めた島しょ部におけるさまざまな仕掛けが、新たな段階を迎える可能性も出てきておりますので、そんなことも含めて、地域の魅力をしっかりと頑張っていきたいと思っております。

ちなみに、かつて3年前に協力をさせていただきましたバリィさんがゆるキャラグランプリで全国優勝をしたのが3年前になります。今年はみきゃんを、ぜひとも後に続けということで応援していただきたいと思ってまして、去年は3位まで来てますので、あながち届かないところではないと。ただ、今回は、多分、浜松市の家康くんというキャラクターがまちを挙げて優勝を狙いに来るということなので、負けられない厳しい勝負になると思いますが、ぜひ皆さん、愛媛県のチームワーク発揮をして、みきゃんを押し上げていただくようお願い申し上げます、最初のごあいさつとさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。